第三者継承により養豚経営に参画したイケメン Twins の挑戦

- 仲間とともに広げる地域農業活性化の輪 -

有限会社花田養豚場(養豚経営・新潟県十日町市)

地域の概況

新潟県十日町市は、県の南部に位置し、長野県境に近い中山間地域であり、東側は魚沼丘陵、西側には東頸城丘陵の山々が連なっている。信濃川が南北に流れ、雄大な河岸段丘が形成されている。冬は積雪量が3メートルを超える全国有数の豪雪地帯であり、11月下旬から翌春の3月中旬頃までは雪に囲まれる一方、夏はさわやかな涼風が吹き抜ける高原のような気候にある。

地域農業は、肥沃な河岸段丘を中心に全国トップブランド米の「魚沼コシヒカリ」の生産とともに、エノキなどキノコ栽培も盛んであり、キノコ廃菌床と家畜ふんをたい肥化し、地域ぐるみで資源循環型農業を展開している。

市内の畜産農家戸数等は下表に示すとおりであるが、隣接する津南町を含めた「妻有地域」は養豚が盛んな地域であり、県が進める飼養衛生管理基準の遵守徹底や安全・安心な畜産物の供給体制への取り組みに積極的に参画している。その結果、市内の養豚場で生産された豚肉が市内の全小中学校の給食に利用される等、高い評価につながっている。



花田養豚場の皆さん(後列左から 田中力さん(専務兼農場長)、田中真衣子さん(真さんの妻)、田中真さん(代表取締役)、前列左から 五十嵐恵美さん(従業員)、根津裕太郎さん(従業員))

当該経営は、養豚農家の経営体質の強化、養豚 農家戸数減少の阻止、仲間づくりの強化等を目的 に地域の養豚仲間9名で昭和60年に設立した「妻 有畜産グループ」の構成員として、銘柄豚「妻有 ポーク」の生産に加え、幅広い地域活動に積極的 に取り組んでいる。

○ 家畜飼養頭数

(単位:戸数・戸、頭数・頭)

区 分	乳用牛		肉用牛		豚		
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	
新潟県	194	6,703	211	11,308	106	177,095	
十日町市	4	105	5	79	6	10,327	

(平成30年2月現在:新潟県農林水産部畜産課調べ)

経営・技術の特色

【血縁関係のない創業家から養豚業を第三者継承 した経営】

田中兄弟は養豚農家の出身ではないが、もともと自宅と農場が目と鼻の先であり、かつ創業家の長男と幼なじみであったこともあり、幼少期から豚舎は遊び場で、自然と養豚に興味を持つようになった。平成9年、田中兄弟の兄、真氏(当時18歳)が務めていた工務店を退職し、就職先を探していた時に雇ってもらえないかと懇願したことがきっかけで同年に入社、平成13年に農場長に就き、

(表1) 経営・活動の推移

年次	飼養頭(羽)数	経営・活動の内容
S59年	種雌豚150頭	・法人設立
505-		創設者: 丸山隆太氏
S60年	種雌豚160頭	・妻有畜産グループ設立
S63年	種雌豚170頭	・繁殖豚舎増築
	13.72.00.11.000	自動給餌ライン設置
		・肥育豚舎新築
H元年	種雌豚190頭	自動給餌ライン設置
		自動除ふん装置設置
H9年	種雌豚200頭	・田中真氏(以下、真氏とする。)が花田養豚場に入社
		・繁殖豚舎増築
H12年	種雌豚210頭	自動給餌ライン設置
		自動除ふん装置設置
H13年	種雌豚210頭	・真氏、農場長に就任
H14年	種雌豚220頭	・田中力氏(以下、力氏とする。)が花田養豚場に入社
	種雌豚230頭	・肥育豚舎増築
H15年		自動給餌ライン設置
		自動除ふん装置設置
		・クリーンポーク生産農場認定
		(畜産安心ブランド生産農場)
H16年	種雌豚230頭	妻有畜産グループ全農場が認定
11104	恒吨水230项	・肥育豚舎増築
		自動給餌ライン設置
		自動除ふん装置設置
H18年	種雌豚230頭	・若手養豚生産者グループ「ぶたのしっぽ」設立
1110	1至200000	定期的に勉強会、研修会を実施
H20年	種雌豚230頭	・補助事業で画像妊娠診断装置を導入して繁殖成績を改善
	種雌豚240頭	・近隣住民への臭気の配慮として防臭壁(高さ7m)を設置
H23年		・真氏が花田養豚場の経営を継承して代表取締役に就任、 同時期に妻が就農
		・力氏が専務兼農場長に就任:
		・創設者の丸山隆太氏が会長職に就任(養豚事業から引退)
	det HII Harry	・妻有ポークが丸の内オリンピッグ2013でレギュラーシーズン、
H25年	種雌豚250頭	クライマックスシーズンともに優勝
H26年	種雌豚260頭	・十日町・津南町若手ファーマーズグループ「ちゃーはん」設立
		・ちゃーはんが、里山商品券付きブック「feel field」を発刊 ・母豚のボディコンディション管理のため、リーンメーター
H28年	種雌豚250頭	・ は豚のホティコンディション官理のため、リーンメーター (背脂肪厚測定器)を導入
H30年	種雌豚230頭	・ちゃーはんが、地域農業紹介フリー誌「Fil Fil」を発刊
H31年	種雌豚220頭	・空間消毒用コンテナ(資材置場)設置
		・繁殖成績の向上による肥育スペースの不足等で計画的に
<u> </u>		母豚数を減少
R元年	種雌豚220頭	・暑熱対策用の業務用製氷機を導入

平成 23 年には代表取締役を任されるに至った。 創業者は、長男が他産業に就職しており、養豚業 を継がないことが決定していたことから、一時は 廃業も考えていたが、養豚業をしかるべき誰かに 託したいという気持ちが強く、従業員である真氏 に経営継承について打診した結果、真氏は代表を 引き継ぐ決心をし、現在に至っている。

さらに田中兄弟の弟、力氏も平成14年から同農場に勤務しており、現在は専務兼農場長を任せられている。双子ならではの不思議な意思の疎通により、相手への思い、理解の深まりが、作業効率の向上につながっている。

【薬剤に頼らない安全な豚肉づくり】

「生後3か月齢以降の抗菌剤の飼料添加を禁止」という妻有ポークの生産 基準を遵守する他、農場の衛生管理を 徹底している。

離乳・肥育豚舎は、豚移動後の洗浄・ 消毒・乾燥を徹底するとともに、朝夕 の1日2回、通路消毒と空間消毒を行 うことにより、特に肥育豚舎では以前 課題となっていた豚胸膜肺炎の減少 につながるなど効果が出ている。

分娩豚舎では、豚房内に入らずに作業するよう心掛けている。通路を歩いた長靴で豚房内に入れば、病原菌を広げる可能性があるとの考えからだが、兄弟2人が協力することで、豚房内に入らずとも離乳子豚の移動が可能になっている。

車両の出入り口には、「無断立入禁止」の看板を設置し、留意事項と連絡 先を明記している。さらに、看板に気 付かずに進入してしまう場合に備え て、チェーンを張って注意を促してい る。

出荷は妻有畜産グループの専用トラックで出荷しており、入退場時の車両消毒の徹底を図っている。特に、と

(表 2) 経営実績(平成 30 年)

				Land the Die			
+mr	(玄玄 20001 梅竺)			家族構成員	2.9 人		
				従業員	2.4 人		
	種雌脂	K 平均節	215.4頭				
	肥育胨	§ 平均師	1,925 頭				
	年間日	子豚 出荷	0 頭				
	年間内	羽豚出荷	 頭数	4,233 頭			
収	所得率(構成員)				9.3 %		
益性	種雌脂	K1頭当	611,342 円				
		種雌豚	1頭当たり	2.26 回			
		1 腹当たり分娩子豚頭数			12. 83		
		種雌豚	1頭当たり	年間分娩子豚頭数	29. 00		
	繁殖	1 腹当たり哺乳開始子豚頭数			11.60 頭		
	714	種雌豚1頭当たり年間哺乳開始子豚頭数			26.2 頭		
		1腹当たり離乳子豚頭数			10.0 頭		
		種雌豚1頭当たり年間離乳子豚頭数			22.1 頭		
	肥育	種雌豚	1頭当たり	19.7 頭			
		肥育豚事故率(離乳時からの事故率)			8.4 %		
生		肥育開始時		日齢	24 日		
産				体重	6 k g		
性		肉豚出荷時		日齢	178 日		
				体重	114 k g		
		平均肥育日数			154 日		
		出荷肉豚1頭1日当たり増体重			0.701 kg		
		飼料要求率		農場	3. 57		
				肥育豚	2.96		
		枝肉重量			73.9 k g		
		販売	肉豚1頭当	áたり平均価格	37, 386 円		
		価格	 枝肉1kg当たり平均価格		460 円		
		技肉規格「上」以上適合率			46.7 %		

畜場に行った後は洗浄・消毒後、完全に乾燥させるように心がけている。

農場の事務所は病原菌の交差汚染予防のために、 農場スタッフ用と外来者用に分かれており、併せ て長靴の洗い場、消毒槽、消毒マットを設置して いる。

平成 31 年 3 月には外部からの病原菌侵入防止を目的として、一時的な資材置場(中古コンテナ活用)を設置した。紙袋飼料や宅配物を搬入する業者にはコンテナ内で長靴に履き替えてから搬入

することを義務付けており、一定時間の空間消毒 を実施した後、農場スタッフが農場内に搬入する 仕組みになっている。

【ストレス軽減への取り組み】

一般的に行われている子豚の切歯は行っていない。以前は切歯をしていたが、単純に子豚がかわいそうという思いから改善策を模索したところ、母乳がよく出ている母豚であれば、子豚同士のケンカも母豚の授乳拒否もないことが確認できた。その後、母豚のボディコンディション管理と分娩後ケアを徹底した結果、切歯をしてもしなくても成績は変わらないという結論に達している。平成28年には更なるボディコンディション管理の徹底を図るためリーンメーター(背脂肪圧測定機)を導入した。ミリ単位で背脂肪厚を管理し、飼料給与量を微調整することで母豚の栄養状態が改善され、虚弱母豚の発生減少につながっている。

離乳・肥育舎は、スペース有効利用の観点から1 豚房11頭収容の設計で作られている。1腹毎の移動がしやすいことから、離乳後の豚は出荷まで1 腹飼いを基本としており、群編成によるストレスを与えないようにしている。

暑熱対策は一般的な水撒き、送風機やダクト等を利用しているが、分娩前や離乳間近の母豚は特に暑がるため、令和元年5月に業務用製氷機を導入し、氷で冷やした水を給水したり、飼料に氷を混ぜたりする取り組みを始めている。

【画像妊娠診断装置やパソコン管理データを利活 用した繁殖成績の向上】

十日町地域家畜指導診療所とのタイアップ体制 により画像妊娠鑑診断装置を共同利用し、管内の





農場全景

双子ならではの意思の疎通で作業効率 UP 搬入

項目	単 位	H19年	H20 年	H21年	H22 年	H30年
1 腹当たり分娩子豚頭 数	頭	11.0	11. 7	12. 0	12. 2	12.8
種雌豚 1 頭当たり年間 平均分娩回数	回	2. 15	2. 20	2. 20	2. 23	2. 26
1 腹当たり離乳子豚頭 数	頭	9. 5	9. 4	10. 2	10. 4	11. 6
種雌豚 1 頭当たり年間 離乳子豚頭数	頭	20.4	20. 7	22. 4	23. 2	26. 2
		\				

コンサル受診実績

繁殖成績向上に努めていたが、共同利用では使いたいときに使えないこともあったので、平成20年に補助事業を活用して農場専用の画像妊娠鑑診断装置を導入し、いつでも診断できる体制を築いた。

見落としがちになりやすい豚の異動状況や健康 状態等はパソコンで管理している。正確に記録す ることで、飼養管理状況を的確に把握し、それぞ れの処置や対応を迅速に行うことで、特に繁殖成 績の改善につながっている。

【SNS や冊子を使った情報発信】

田中兄弟それぞれがフェイスブックのアカウントを所有しており、養豚仲間や消費者等に農場での出来事や妻有ポークのグルメ情報などを発信している。

田中兄弟が所属する若手ファーマーズグループ 「ちゃーはん」もフェイスブックの開設や情報誌 を発刊しており、養豚のみならず地域農業全体の 活性化につなげるべく様々な活動を行っている。

※若手ファーマーズグループ「ちゃーはん」について

平成26年9月、十日町市及び隣接する津南町の若手ファーマーズで、活動グループ「ちゃーはん」を設立し、農業を通じた地域活性化や販路開拓など地域の農の可能性を広げるべく様々な活動に取り組んでいる。

今までバラバラだった若手の養豚農家、米農家、 野菜農家などが「すべての食材がひとつになった ら、チャーハンが作れるよね」そんな一言から始 まったチームで、ワークショップや田植え・稲刈 り、野菜収穫ツアーなど、消費者交流イベントを積極的に開催している。

【地域一丸となった取り組みを実践する養豚経営を展開】

全国的に猛威を振るっていたオーエスキー病の侵入を防止するため、平成元年に外部導入豚に対する隔離豚舎(養豚農家で組織する十日町市隔離豚舎組合

が管理)を設置し、検疫等の防疫対策に取り組んできた結果、現在まで県内はおろか全国的にも稀なオーエスキー病・PRRS 清浄地域となっており、このことが、子豚期から出荷まで抗生物質無添加飼料による飼養を可能とする衛生的な環境を作り上げている。この先代たちが確立した地域防疫体制を田中兄弟をはじめとした地域の若い世代の後継者がより強固なものとしている。

耕畜連携の活動

地元の稲作農家、生産組織などへ豚ぶんたい肥 を供給し、資源循環型農業の推進に貢献してい る。

生ゴミや未利用資源のたい肥化施設である川西 有機センターに豚ぷんを供給することで、資源循 環型農業の一翼を担っている。

地域に対する貢献

【花田養豚場の取り組み】

法人設立当初から、臭気対策として農場の周辺 に樹木を植えていたが、飼養規模の拡大に伴い、 近隣住民から臭気に関する苦情が出るようになっ た。

そのため、平成 23 年 7 月に敷地の周辺 (住民地側) に高さ 7 メートルの防臭壁を設置した。

設置後は、臭気の拡散減少とともに、豚舎を住民 の視界から遮断する効果もあってか住民からの苦 情が無くなった。

【妻有畜産グループでの取り組み】

真氏は妻有畜産グループの事務責任者として中心的な存在となっており、当該農場の従業員のみならず、地域全体の養豚従事者のスキルアップに取り組んでいる。

特に若い生産者や従業員教育に力を入れており、 平成18年に地域の若手養豚生産者で組織する「ぶ たのしっぽ」という会を作り、消費者に安全でお いしい豚肉を供給するため、最新の衛生対策など 養豚技術を学ぶ勉強会を定期的に開催している。

「安全・安心なおいしい豚肉を消費者へ」との 思いが強く、こだわりを持って肉豚を飼養してお り、特に子豚期から出荷までの抗生剤無添加飼料 の使用は特徴的である。

子供たちに学校給食の材料供給元がはっきり判るものを食べさせたいとの思いから、学校給食関係者などを対象として「地産・地消視察研修会」等の交流会を開催し、妻有ポークの生産に理解を求めてきた。

消費者等による食肉センターや食肉加工施設の 視察を通じて、衛生的な食肉処理と検査体制の実 態を知ってもらい、地元畜産物の利用と地産・地 消について理解向上に努めた結果、現在では十日 町市内の全小中学校の給食で妻有ポークが採用さ れている。

平成12年に設立された地元の肉卸、加工会社の (有)ファームランド木落は、地元豚肉を使った商品 の開発、製造、販売を行っている。

コロッケ、メンチカツなどの定番商品から、豚ジャーキー、豚カレーなど様々な商品を販売しており、平成25年度開催の丸の内オリンピッグ2013で妻有ポークがレギュラーシーズン、クライマックスシーズンでW優勝してからは、のぼりを作成して大々的に優勝(日本一うまい豚肉)を PR するなど販売促進に努めている。

また、十日町農業協同組合の直売所「ベジぱーく」での精肉・加工品販売、観光物産館食堂でのと んかつ等の提供、加えて十日町市内の大手スー パーマーケット 2 店舗、十日町市外の 6 店舗(新 潟市・長岡市・上越市)での精肉販売等、地元を超 え県内に広く知れ渡る銘柄豚肉へと成長している。

全国的に珍しい取り組みとして、管内の養豚仲間と妻有畜産構成員とで作る 40 年以上の歴史を持つ自主研究グループ「TPPC (津南・十日町ポークプロデュースクラブ)」において、衛生面の関係で実施が難しいとされる生体の共進会や、優良個体を識別する能力を競うジャッジングコンテストを実施している。肉豚を観察する目を養うことと消費者ニーズにあった生産性の高い豚肉生産についての知識と能力を深めることを目的として開催しており、地域の養豚仲間達が毎年楽しみにしている行事となっている。また、管内で行う農業祭等に積極的に参加し、子豚レースを開催するなど、地域活性化に積極的に取り組んでいる。

生活の視点の配慮について

コミュニケーションを通じた仕事への意欲向 上や信頼関係の構築など、創業者が築いた従業員 教育の伝統を現代表がしっかりと継承し、従業員 育成に取り組んでいる。

事務所の壁には従業員各自が目標を掲げており、代表は従業員それぞれの目標を把握し、従業員も目標達成に向けて努力することにより、進捗状況の確認やアドバイスなどのコミュニケーションツールの一つとして活用している。

また、事務所は常に清潔に保たれ、女性でも気 兼ねなく過ごせるスペースとなっている。各種養 豚情報誌はいつでも閲覧できるように整頓してあ り、事務所内での打合せや勉強会で活用している。

労力的な負担が少なく、女性でも作業がしやすいように自動給餌ライン、自動除ふん装置など機械化による省力管理方式を採用している。

加えて、ウィークリー養豚を実施することで、 従業員の休日確保など、ゆとりのある養豚経営に 努めている。

将来の方向性について

繁殖成績の向上による飼養頭数の増加により肥育スペースが不足気味となったため、一時的に母豚規模を220頭に縮小したが、今年度中には240頭程度に増頭する計画である。しかし、畜舎の老朽化が目立ち始めているので、労務の改善と作業効率の向上が図られるよう施設の改修を検討している。改修にあたっては、より一層衛生的で豚にとってストレスが少ない環境で飼養可能な施設を整備したいと考えている。

現在は、住宅地側のみ防臭壁を設置しているが、数年後には農場全体を防臭壁で囲うなど畜舎周辺環境の更なる整備、充実を図り、地域の環境保全に努めたいと考えている。

地域農業のさらなる活性化、仲間との絆を深める ため、ぶたのしっぽ、ちゃーはんをはじめとした 各種の勉強会や交流会を一層充実化するとともに、 人と人とのつながり、仲間の大切さ、地域の輪を 広げ、「地域には自分だけではない。自分の判断だ けで農場の未来を決めてしまうのではなく、仲間 の声を聞ける環境を築く」ことを目標として、切 磋琢磨していきたいと考えている。